



海を埋め尽くすマッコウクジラの大群。
このような大群は、近年では滅多に見
られなくなった。写真はすべてインド
洋、スリランカ。2014年3月15日

【営みの地球】148

マッコウクジラの大群

潜水の名手として知られるマッコウクジラ。
成長した雄は体長20メートルにも達し、
ダイオウイカまで食べてしまう。
巨大な彼らの大群をとらえた。

写真・文 / トニー・ウー
Photo & Text by Tony WU

マッコウクジラの親子。この角度からだと、親クジラの胸ビレの骨の形がよく見える。私たちの手指の骨と同じ。2014年3月17日



交流会に飛び入り参加

マッコウクジラはほぼ世界中の大洋に生息している。私たちと同じく肺呼吸をし、熱い血が流れる恒温の哺乳類だが、呼吸はたまに海面に浮上してするだけでいい。普段は暗くて冷たい深海で好物のイカなどを追いかけて、水深2000メートルも潜ることもできる。マッコウクジラは肉食で口が大きく、下顎に立派な歯を持っている。成体の雌は体長約11メートル、体重14トン。雄の体長は雌のおよそ2倍、体重は3倍もある。船を壊されたという話があったり、小説『白鯨』に登場するマッコウクジラが凶暴に描かれていることもあり、危険なクジラというイメージを持つ人も多い。私もかつてはそうだった。

2000年9月に初めて遭遇したマッコウクジラは、私を音波で見つけて近づいてきた。脚を唾^{つよ}えられた瞬間、私は完全に死を覚悟した。ところが、その後3時間もクジラと触れ合って、最後にはなんと親友になれたのだ。生還し、後にマッコウクジラに没頭することになるなんて、想像もしなかった。以来私はマッコウクジラとの触れ合いがライフワークとなり、彼らの群れに参加し、撮影してきた。

掲載の写真はすべて、またとない貴重な光景を目撃したときの記録である。インド洋のど真ん中で数百頭、お

そらくは数千頭と思えるクジラが大集合していたのだ。見渡す限り360度、クジラが生き生きと泳ぎ回っていた。互いに押し合いへし合いしては巨体をくねらせたり回転したり、まるで狂喜乱舞しているように見えた。

何という壮観！ 巨大なクジラの巨大な群れ。おしゃべりも盛り上がり、さまざまな音波や多彩な^ク声^クが飛び交っている。意味ありげなリズムが私の体内で反響し、仲間同士の強い絆がじかに伝わってきた。

ただ撮影は、観察ほど容易^{たやす}くはない。この空前の大規模集会では、彼らの社交性や行動様式を理解しなければ良い写真は撮れない。しかも触れ合いが長時間続いて、はがれた皮膚や脂や糞で海水が濁り、大量の水泡も出てカオスになることもある。

なぜ、どんな方法でこれほどの大群が集まったのかは誰にもわからない。だが私は、交流会だと確信している。みんなと触れ合って挨拶し、友だちと再会し、集う喜びを共有するイベント。マッコウクジラは生息場所こそヒトと異なるが、彼らも個々を識別でき、家族がいて、友だちがいる。文化も感情もあるはずだと私は信じて疑わない。

人生初のクジラとの出会い以降、私の理解は格段に進んだ。あのマッコウクジラは私を襲ったわけではない。クジラ語で挨拶してくれた。それが私の人生を変えたのだ。

口を開けてあいさつをするメスのマッコウクジラ。上の歯がないのが良く分かる。歯をもつ動物では世界最大。2014年3月22日





仲間と触れ合うマッコウクジラ。体の接触や泡、排便、体の回転などで互いに意思疎通している。2014年3月15日



トニー・ウー

クジラの撮影で世界的に知られるフォトグラファー。世界で最も歴史のあるワイルドライフの写真賞、ワイルドライフ・フォトグラファー・オブザイヤーでは、水中部門で2回、哺乳類部門で1回の計3回も1位に輝いた。